

「かながわの遺跡」展 第2回特別講演 梗概  
平成29年1月7日(土) 14:00～16:00  
於川崎市市民ミュージアム

## 神奈川の歴史の始まり：考古学から見た日本列島における現代人の出現

佐藤宏之 (東京大学)

### 1. はじめに

日本列島(以下「列島」と略記)の歴史の始まりは、今から12万年前の中期旧石器時代後半期にさかのぼる。しかしながら、日本旧石器学会の集計によれば、列島の旧石器時代の遺跡数は14,500に上るが、このうち中期旧石器時代の遺跡は約30遺跡にすぎないので、その大部分は現生人類が残した後期旧石器時代(38,000～16,000年前)に属する。今日まで列島から発見された旧石器時代人骨は、沖縄を除けば浜北人(18,000年前、浜松市)だけなので、列島の中期旧石器時代遺跡を残した人が旧人だったかどうかは不明である。

そこで本講演では、列島に本格的に人が住み始め、その歴史が開始された後期旧石器時代初めの頃について、主として現生人類の出現に関わる話題を中心に述べてみたい。

### 2. 現生人類(現代人)型行動とは何か

世界最古の人類(猿人)は、700万年前頃のアフリカで誕生するが、その後200万年前まではアフリカにとどまっていた。250万年前頃になると最古のホモ属(原人)が出現し、200～180万年前頃にはアジア大陸の南側に広がり、ヨーロッパ等ではネアンデルタール人のような旧人に進化するが、かれらはその後すべて絶滅したと考えられている。それは20～15万年前頃のアフリカで新たに出現した現生人類ホモ・サピエンスが、その後ユーラシアに拡散する過程で、先行人類に置き換わったためである。現生人類は、先行人類が居住していた範囲を超えて、さらに寒冷な北方や新大陸・大洋にも進出し、最終的に南極等の一部の居住が困難な地域を除いて、地球上のほぼすべての土地をみずからの生活領域とした。

では現生人類のこの巨大な成功は、何が原因であったのだろうか。現在研究者の間で最も有力な解釈は、現生人類だけが獲得できた各種の能力と、それを可能とした認知能力の飛躍的進化(突然変異)にあるとされている。

研究の進んでいるヨーロッパでは、1980年代になると「後期旧石器革命」説が主張されるようになった(図1)。それは当時知られていた旧石器時代の考古学的証拠を総覧すると、約4万年前<sup>1)</sup>を境に多くの革新的な行動の証拠が一挙に出現するので、これらを

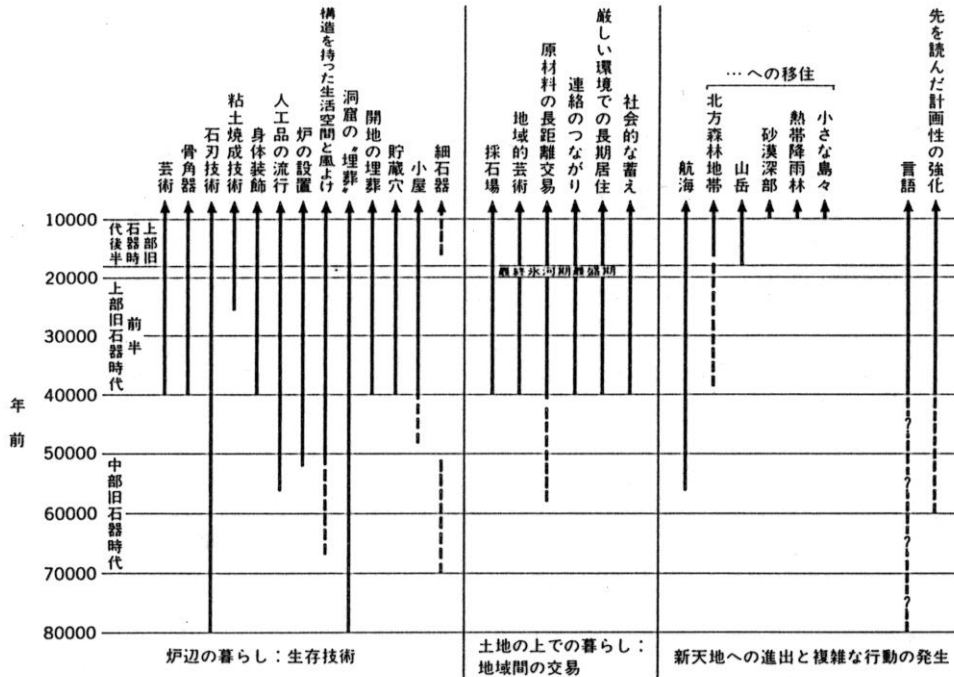
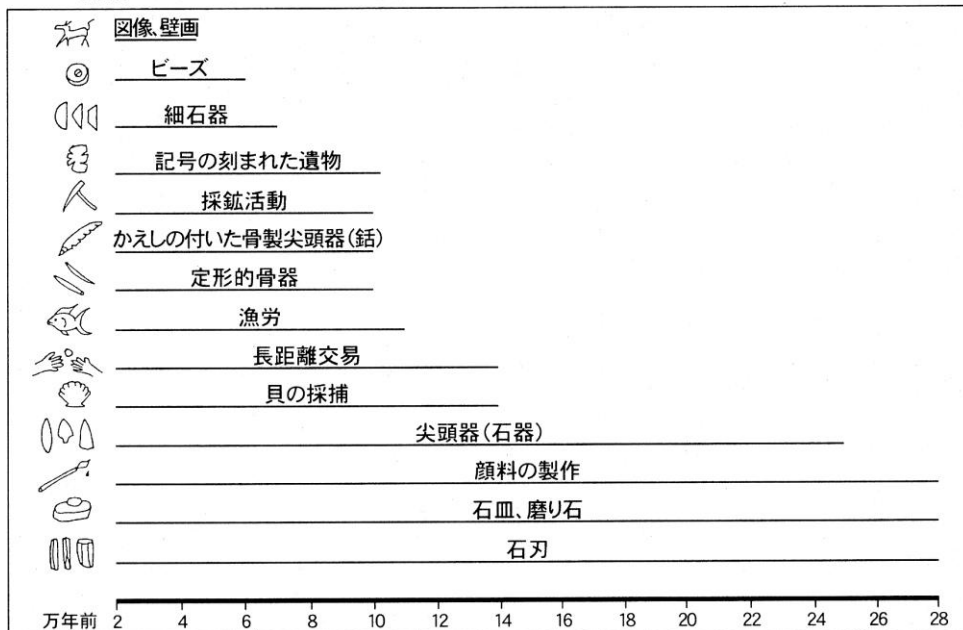


図2 古代人と現代人の行動の差に関する考古学的証拠 (STRINGER (1997) による)。現代人の出現する4万年前を境にして、人類の行動上の質的な格差は非常に大きい。古代人は、寒冷な氷期の気候環境に頑健な身体で適応し、周囲の環境を場当たり的に利用する生存戦略に依存していたので、他の集団との社会的関係が薄かった。いっぽう、華奢な身体をもった現代人は、古代人とは異なり、劣悪な環境に対して好適環境間を計画的に移動する戦略を採用することで対処した。それには、無計画な移動がもたらす隣接集団との緊張を避けるため、集団間での社会的関係の構築が必要となる。遠距離交易品や異なる様式の遺物の存在は社会的交換網の存在を、身体装飾や独自の様式などは集団のアイデンティティーの出現を示す。また、周到に計画された行動戦略を確立するためには、発達した言語能力に始まる多くの革新的な技術を開発せねばならなかった。

### 図1 ヨーロッパにおける「後期旧石器革命」

図5 マクブレアティらが「存在しなかった革命」論文に掲載したアフリカにおける現代人的行動の始まり



様々な行動が、一斉にはではなく、個々別々の時期に現れたことを示す。ただし、詳しい年代については、その後修正する必要があるが出てきている。McBrearty, S. and Brooks, A. S. 2000 を改変

### 図2 アフリカにおける現生人類型行動の発現

「現生人類型行動」と総称し、その出現が現生人類の登場を意味すると解釈した。一方、1980年代の終わり頃に、遺伝人類学の成果である「ミトコンドリア・イブ仮説」が提出され、現生人類のアフリカ単一起源説が確定すると、今度はアフリカにおける考古学的証拠が総覧された(図2)。そこでは、アフリカにおいては、現生人類型行動が20万年前から徐々に出現することが明らかにされたので、考古学的な現生人類型行動が、現生人類の出現を示すとする解釈が定説とされた。

西ヨーロッパでは、後期旧石器時代になると、考古学的証拠の内容が質量ともに大きく変化する。石器製作技術は、それまでのムステリアンから石刃技法に置き換わり、それまで利用範囲が狭く限られていた石器石材は、優良な石材の遠距離・広域にわたる選択的利用が顕著になる。さらに骨角器、洞窟壁画、骨牙土石製のヴィーナス像、各種の装身具が出現し、埋葬行為も普遍化する。こうした考古学上の変化は、現生人類型行動と総称され、先行人類が基本的には持ちえなかった現生人類特有の行動・認知能力を獲得したからと考えられた。すなわち、石器製作技術がより規格化し、石器の器種分化も著しく、その革新速度も飛躍的に増した(図3)。それまでは単に食糧の残滓としてしか認識されていなかった骨や牙を、道具や装身具等の素材に活用するようになった。遺跡の分布や内容から、飛躍的な人口増があった可能性が高く、人口密度が増したため、居住=生計戦略が著しく計画的かつ組織的になり、同時に階層的な資源利用の領域が形成され、社会的ネットワークが作られ始めた。壁画や彫像・装身具等の存在は確かな精神活動を示すとともに、複雑化した集団関係を調整するための集団的アイデンティティを表現する手段であると考えられている。それまでのネアンデルタール人の墓には見られなかった豊富な副葬品の存在は、死後の世界観(神話)の誕生を意味するものと解釈された。そして、これらの諸現象が出現する背景には、社会構成員間の意思・情報伝達を容易にする言語能力の発達と、過去や未来を予測し、周囲の自然を文化社会的な景観として認識させ、相手の心を推測する認知能力(心の理論)の獲得があると考えられた。この認知能力こそが、サピエンスの世界制覇を可能とした最大の要因であった(図4)。

研究の進展に伴い、これまでの単純な人類種と石器群の対比<sup>2)</sup>は細かいレベルでは破綻しているため、特定の石器群を残した人類種を正確に同定するためには、化石人骨の共伴を確認せねばならないが、更新世の化石人骨の出土例はきわめて乏しいため、直接の証拠を得るのはそのままでは困難である。翻って、考古学的証拠は相対的に豊かであるため、現生人類型行動をもって現生人類出現の証拠と考えるのは、理にかなっている。

### 3. 列島の自然環境

列島に初めて現生人類が出現した後期旧石器時代は氷河時代であった。250万年前に始まる更新世は、10~12万年毎に現れる短い温暖期を除くと寒冷な気候に支配されて

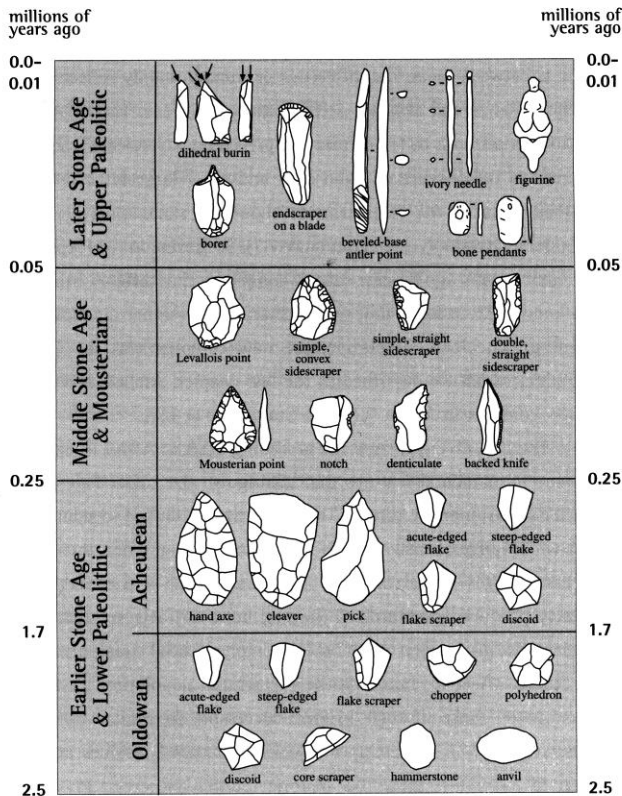


FIGURE 7.7  
The principal artifact complexes ("cultures" or "culture-stratigraphic units") discussed in the text. The individual artifacts are not drawn to scale.

図3 旧石器時代の人工物の変化

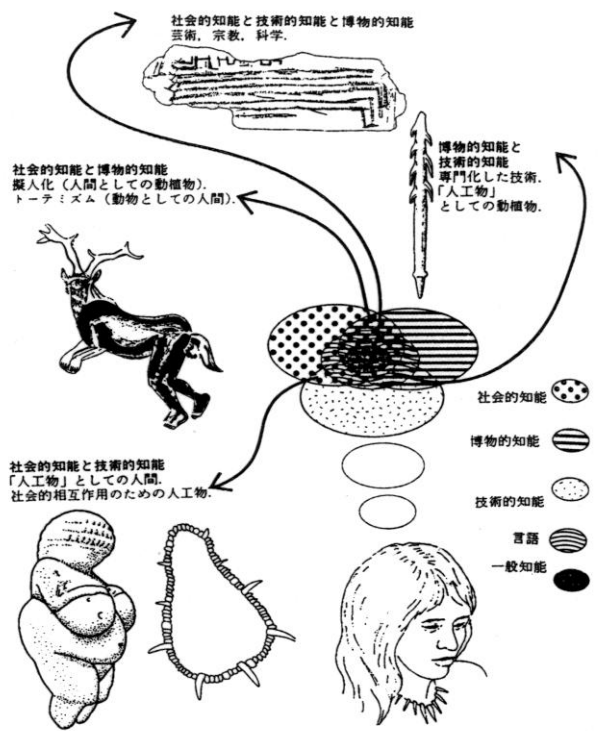


図5 認知的流動性と文化の開花  
ミスン (1998) 235 頁より

図4 現生人類の認知流動性

いたため、水分が陸上に氷として固定された結果、著しい海面低下を招いた。12 万年前の最後の温暖期(最終間氷期)以降で最も寒冷な最終氷期最寒冷期 LGM(25,000~20,000 年前)の列島では、海面が 140m 程度低下したと考えられており、後期旧石器時代初頭の相対的な温暖期においても 80m 程度の海面低下が想定されている。その結果、列島は 3 つの地形的単位から構成されていた。

ひとつは、今日のサハリン・北海道と千島列島南部が連なってアジア大陸に陸接する古北海道半島。第二は、本州・四国・九州がひとつの陸塊を形成していた古本州島。第三は、陸域は拡大していたが依然として島嶼から構成されていた古琉球諸島の三者である(図 5)。この 3 つの地形単位は、その後の歴史的経過を異にするが、その基本は旧石器時代に形成されていた(図 6)。

従って、列島の自然環境も、今日とは大きく異なっていた。今日の列島の四周を流れる海流は、津軽海峡や朝鮮海峡が著しく狭まっていたことと陸域の拡大によって日本海に流入しなかったため、日本海は今日のオホーツク海のような上層に淡水が滞留し、冬期を中心に海水が発達した。そのため列島の気候は基本的に大陸性の寒冷乾燥気候が支配していた。さらに、より重要なことは、氷期の古気候が世界的にダンスガード・オシ

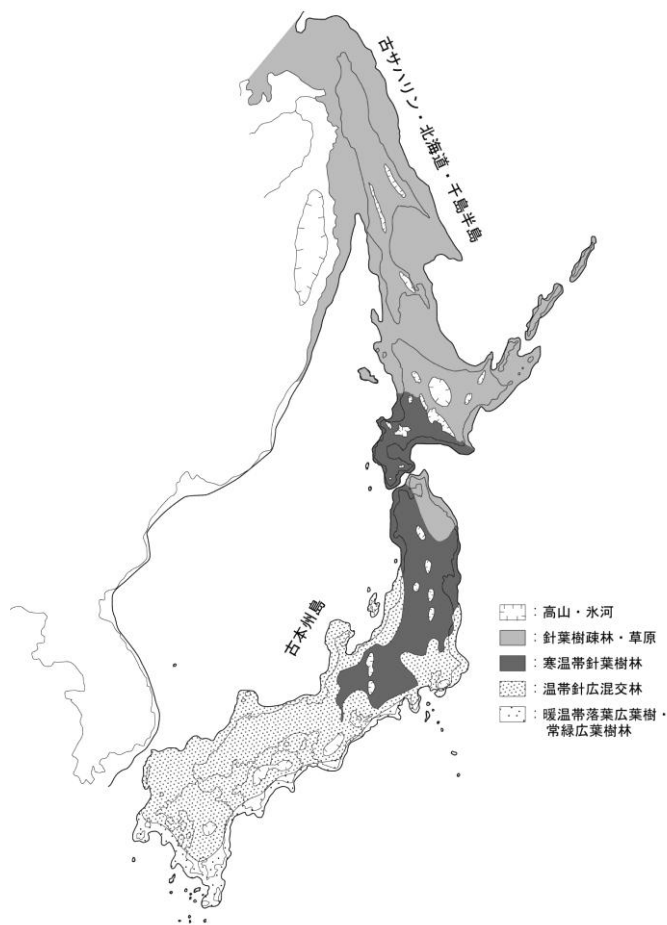


図5 LGM期の日本列島の地理的環境と植生

ユガー・サイクルと呼ばれる短期間に寒暖の差がめまぐるしく変動する不安定な気候に支配されていたことにある(図7)。LGM期の復元植生(図5)によれば、古北海道半島東部はツンドラ性の草原か疎林に覆われており、同西部から古本州島東半部には今日のアムール川下流域の植生に類似した寒温帯針葉樹林が、同西半部には今日の北海道東部に広がる針広混交林が発達した。これらの植生帯では縄文時代以降の完新世に繁茂するドングリ・クリ・トチ

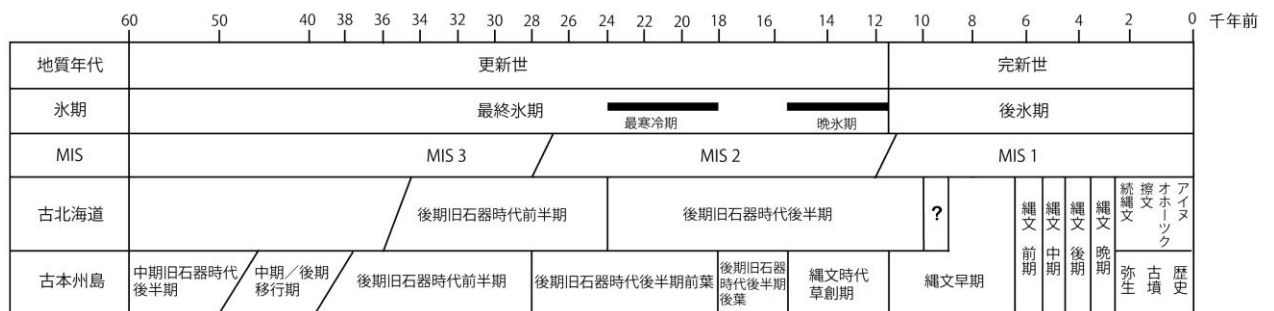


図6 日本列島の自然環境と歴史

ノキといった堅果類がほとんどなく、有用植物資源に乏しかった。唯一植物資源を計画的に利用可能な植生帯は、古本州島南岸に張り付くように分布し、それ以南の古琉球諸島に分布していた落葉広葉樹・照葉樹林帯だけであった。

動物相は、34 万年前頃に朝鮮半島から侵入し、主に古本州島に分布したナウマンゾウ・オオツノシカ動物群と、5 万年前頃にシベリアから南下して古北海道半島に広がったマンモス動物群から構成されていたが、両者のうちゾウ・ウシや大型のシカといった

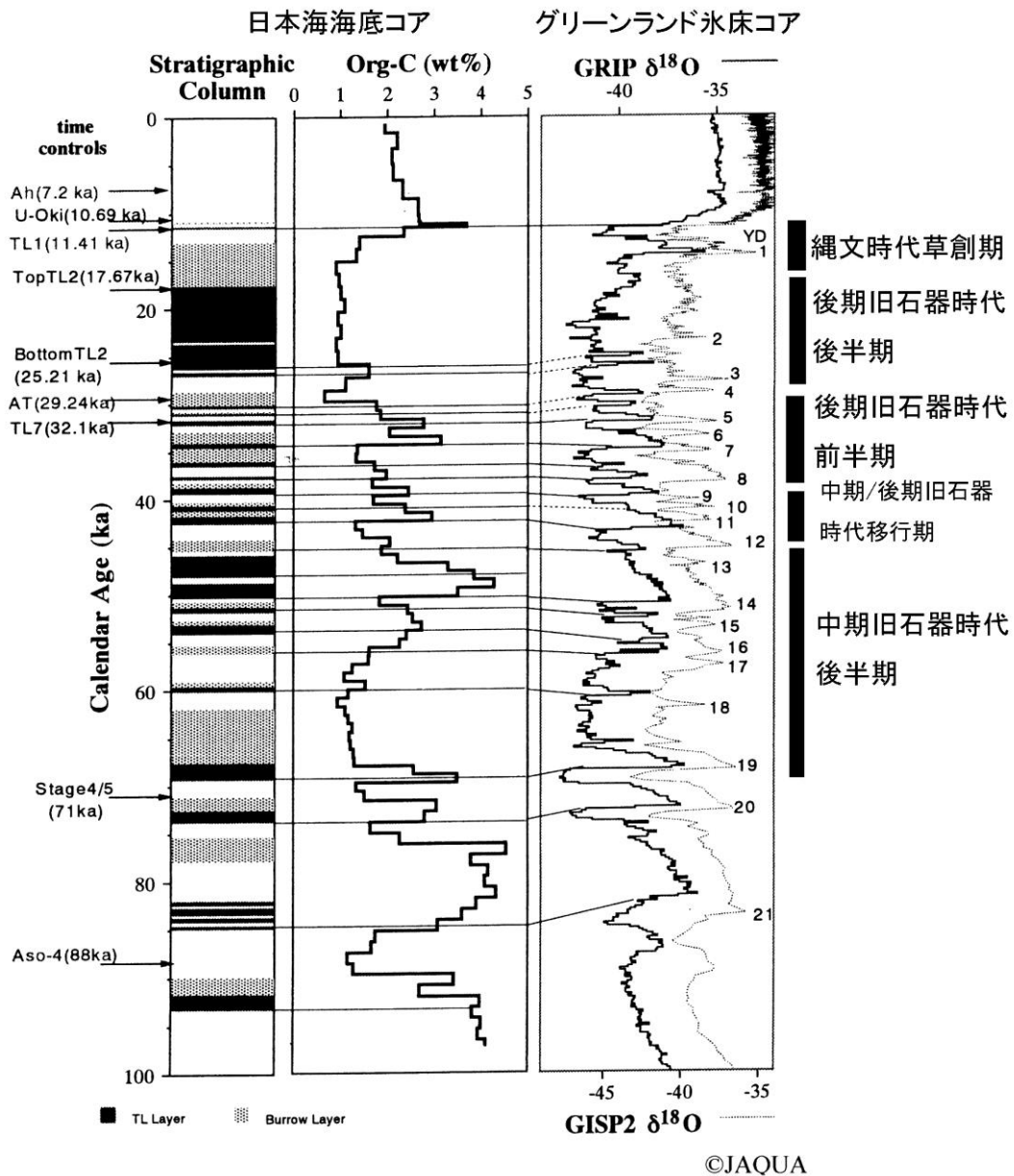


図7 日本列島先史時代の気候変動

大型動物は、前者が LGM 開始期までに、後者では 20,000 年前までに絶滅した。その残りが、今日の動物相を作り出している。

以上のような自然環境に基づいて、後期旧石器時代の人類が利用した資源環境は今日とは著しく異なっていた。基本植生に植物資源が乏しいことに加えて、短周期で変動する不安定な気候においては、植物資源はあてにできず、定着的な生業である漁撈も発達しにくかったため、人々は広域に移動する大型動物のような動物資源の狩猟を生業の柱に据えていた。列島の石器資料の多くが狩猟具から構成されていることは、このことをよく示している。

#### 4. 現生人類の出現：列島の後期旧石器時代

現生人類型行動のパッケージの中身は、アフリカやヨーロッパを離れるにつれて、各地で少しずつ異なっている。例えば列島では、後期旧石器時代に入ると突然遺跡数が増加するので人口増が起こったことは確かであり、遺跡や遺物の構成内容等から見て、石器製作技術が規格化し、その革新速度も飛躍的に増大した。計画的行動が出現し、階層的で連鎖的な集団間関係等の複雑化した集団構成も認められる。しかしながら、同時にこれらの発現形態には、列島の独自性も強く看取できる。

##### (1) 黒曜石の計画的利用

列島における初期の現生人類文化の独自性は、前述した地理的環境を背景として、特に古本州島で特徴的に認められている。火山ガラスの一種である黒曜石は、石鏃等によく利用される代表的な優良石材であり、先史時代の主要な石器原料であったが、最初期の遺跡では用いられることがなかった。黒曜石は主として火山噴火に伴い生成されるため、列島の大規模な黒曜石産地は中央山地等の高山地域や山地帯に形成されている。一方人間の生活空間は、狩猟活動を行うのに有利であった台地等の平坦地で主として展開されたため、遠距離にある黒曜石の利用には、計画的な行動戦略が必須となった。列島では、現生人類が出現する後期旧石器時代前半期(38,000～28,000年前)初頭から、黒曜石が各地でいっせいに利用されるようになる。南関東・中部地方南部では、38,000年前の後期旧石器時代初頭において、すでに伊豆神津島産の黒曜石で作られた石器が出土しているが、氷期の海面低下によっても神津島は古本州島と陸接することは一度もないため、その利用には本格的な海洋渡航技術と計画的行動が必須と想定され、すでに現生人類がその技術を有していたことを意味する。これは世界的にも希有な事例であり、列島型の現生人類型行動を表象していると考えられる。

##### (2) 環状集落

また後期旧石器時代前半期前葉には、石器等の遺物が径20～80メートルに及ぶサークル状に分布する特徴的な出土状況を示す例が、古本州島の中央部を中心に、現在120例ほど確認されている。その性格をめぐって議論が盛んに行われているが、季節的あるいは特定の作業を目的とした環状の集落ではないかとする説が有力である。いずれにせよ、階層的な集団構成の存在を示唆する、列島独特の現生人類型行動のひとつであろう。





図8 千葉県池花南遺跡の環状集落



図9 東京都鈴木遺跡出土の局部磨製石斧

### (3) 局部磨製石斧

この環状集落では、刃部付近だけを研磨した特殊な石器である局部磨製石斧がまとまって出土している。現在列島では、900例を越える局部磨製石斧の出土例が報告されているが、同時期の類例は周辺大陸にはない。おそらく森林資源の活用に適応した列島独自の石器であった可能性が高い。

### (4) 陥し穴猟

さらに注目されるのは、古本州島南岸域に限定して認められる後期旧石器時代前半期に行われた陥し穴猟である。罾猟の一種である陥し穴は世界中に見られるが、後期旧石器時代初頭にまで遡る例は列島にしか認められていない。旧石器時代の生業の主体は狩猟にあるが、それは主として植物資源に乏しい列島の更新世の自然環境に起因している。ところが陥し穴猟が発達した古本州島南岸域だけは、列島の大部分の地域とは異なり、後の縄文時代の主要食糧資源であるクリ・トチ・ドングリ等の堅果類等を提供する落葉広葉樹林や常緑広葉樹林が広がることで例外的に植物資源が豊富な植生帯であった(図5)。植物資源の収穫には、定着的な活動が要求される。そのため、定期的な見回りや補修が必要なことから定着的な生業に属すると考えられる罾猟を展開可能な生態条件を有していたと考えられる。



図10 静岡県初音ヶ原遺跡の陥し穴

こうした反面、大陸やオーストラリア(サフル大陸)で顕著に認められている彫像や装飾品等の出土が列島では極めて少なく、この時期の確実な墓もほとんどないので、精神



活動に関連する考古資料に欠けるのも、列島旧石器文化の最大の特徴となっている。

以上のような列島独自の現生人類型行動の発現は、いずれも列島という自然環境の特殊性に起因した列島旧石器人の独自の適応行動をよく示している。日本列島の文化は、その成立段階から強い独自性を有していたと言えよう。

## 註

- (1) 現在では、47,000 年前になると中期旧石器時代のムステリアンの中に、現生人類の文化が散在する現象が始まり、それらが次第に分布を広げ、最終的には 40,000 年前にムステリアンが消滅して、現生人類文化だけになることがわかっている。
- (2) 前期旧石器時代=アシュურიアン=原人、中期旧石器時代=ムステリアン=旧人(ネアンデルタール人)、後期旧石器時代=石刃技法=現生人類といったような対比。

## 参考文献

- 安斎正人・佐藤宏之編 2006 『旧石器時代の地域編年的研究』同成社
- 稲田孝司・佐藤宏之編 2010 『講座日本の考古学 第1巻旧石器時代(上)』青木書店
- 稲田孝司・佐藤宏之編 2010 『講座日本の考古学 第2巻旧石器時代(下)』青木書店
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤宏之 2002 「旧石器研究の現代的意義」『科学』72(6): 594-599、岩波書店
- 佐藤宏之 2002 「日本列島旧石器時代の陥し穴猟」『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』[国立民族学博物館調査報告 33 号]83-108 頁、国立民族学博物館
- 佐藤宏之 2005 「日本列島の自然史と人間」『日本の地誌 第1巻 日本総論 I (自然編)』80-94 頁、朝倉書店
- 佐藤宏之 2006 「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』2:47-54
- 佐藤宏之 2007 「持続的資源利用の人類史」日本第四紀学会編『地球史が語る近未来の環境』145-163 頁、東京大学出版会
- 佐藤宏之 2008 「東アジアにおける後期旧石器時代の形成」『異貌』26: 2-15
- 佐藤宏之 2013 「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座日本歴史 第1巻原始・古代1』29-62 頁、岩波書店
- 佐藤宏之 2016 「更新世の日本列島における自然・資源環境の変動と人類行動の応答」『田中良之先生追悼論文集 考古学は科学か』199-214 頁、北九州中国書店
- 佐藤宏之編 2005 『食糧獲得社会の考古学』朝倉書店
- 佐藤宏之編 2007 『ゼミナール旧石器考古学』同成社
- 佐藤宏之・飯沼賢司編 2011 年 『野と原の環境史』文一総合出版